



Title	ジェームズ・C・スコット著（佐藤仁監訳）『ゾミア-脱国家の世界史』（書評）
Author(s)	笹岡, 正俊
Citation	林業経済, 68(8), 24-28 <a href="https://doi.org/10.19013/rinrin.68.8_24">https://doi.org/10.19013/rinrin.68.8_24</a>
Issue Date	2015-11-20
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/77273">http://hdl.handle.net/2115/77273</a>
Type	article
File Information	sasaoka_ringyoukeizai_68-8.pdf



[Instructions for use](#)

笹岡正俊 2015.11

## 書評 ジェームズ・C・スコット著 (佐藤 仁監訳)

ゾミア  
脱国家の世界史

笹岡 正俊 (北海道大学)

## 1. はじめに

本書『ゾミア—脱国家の世界史』は、「モラルエコノミー」論や「日常的抵抗」論などで、日本の政治人類学・社会学者や、東南アジアをフィールドとする地域研究者にも大変なじみの深い知の巨人、ジェームズ・C・スコット氏（以下敬称略）が2009年に刊行した著作である。

原題の“The Art of Not Being Governed: An Anarchist History of Upland Southeast Asia”が示すように、本書が光を当てるのは、東南アジア（大陸部）の山岳地域に暮らす人びとが身につけてきた「低地国家によって統治されないための術」と、それによって、国家による収奪をかわし、国家に内在する従属関係に組み込まれることに抗してきた名もなき「アナーキスト」民衆の歴史である。

和書のタイトルとなっている「ゾミア」は、そうした人びとが長らく国家に組み込まれることなく、自律・自治を維持してきた場所である。地理的には、ベトナムの中央高原からインドの北東部にかけて広がり、東南アジア大陸部の五カ国（ベトナム、カンボジア、ラオス、タイ、ビルマ）と中国の四川省を含む広大な丘陵地帯を指す。ゾミアは国家の中心部で生じる侵略、奴隷狩り、疫病、強制労働から逃げてきた人たちが少なくとも2,000年もの間、次から次へと住むようになった、世界のなかでも最も広く、また歴史のある避難地域である。

本書でスコットが目指すのは、国家形成への反応として、ゾミアが意図的に作り出された無国家空間であることを描くこと、そして、そこに暮らす山地民を「文明から取り残された原初状態にある人びと」とであると考えると、低地で育まれた文明論を脱構築する

ことである。

## 2. 本書の概要

本書は、監訳者によるあとがき、用語解説、原注を除いても、340頁を超える大著である。それを要約することは評者の手に余る仕事だが、以下、本書を構成する各章の概要についてみていきたい。

本書は、「はじめに」を除くと、以下のとおり10章からなっている（なお、各章のあいだには内容にかなりの重複がある）。

はじめに

I：山地、盆地、国家—ゾミア序論

II：国家空間—統治と収奪の領域

III：労働力と穀物の集積—農奴と灌漑稲作

IV：文明とならず者

V：国家との距離をとる—山地に移り住む

VI：国家をかわし、国家を阻む—逃避の文化と農業

VI + 1/2：口承、筆記、文書

VII：民族創造—ラディカルな構築主義的見解

VIII：再生の預言者たち

IX：結論

第I章は、東南アジアに限らず世界各地において「支配と従属関係が確立している地域」がある一方、そうした「従属関係が築かれず、自らの自律を維持する人びとの空間」が存在するのはなぜか、という問いから出発する。「国家の下で統治される人びと」と「自律を維持する人びと」といった二項対立は、平地民と山地民、開拓民と原住民、下流と上流、文明と野蛮、近代と原始、歴史を持つ人びとと歴史を持たない人びとといった具

合に、低地で育まれた文明論のなかで、さまざまな形をとりながら現れる。スコットはこうした二項対立的な関係にある両者の比較を行っている。そのなかで、本書の中心的な命題、すなわち、統治圏の外側の「辺境」に暮らす人びとが、原初的な社会形態のまま取り残された者たちではなく、自律の維持という観点から、居住地、生業活動、社会構造を積極的に選択してきた人々たちであったという点、また、旧来の社会進化論を含む文明論のなかで、「原始社会の痕跡」であるとみられてきた山地民が持つ特性、すなわち、地理的周縁性、移動性、焼畑農耕、流動的社会構造、宗教的異端、平等主義などは、国家からの逃避と国家形成を阻むための適応の結果であったという点が示される。第I章はスコットの論じるゾミア論のいわば「導入」にあたる部分である。

第II章で扱われるのは、東南アジア大陸部における国家空間形成の論理と動態である。国家が税もしくは地代（食糧、賦役、兵力、貢物、交易可能な品、正貨）に依存している以上、どのようにすれば最小コストで安定的に十分な労働力や穀物余剰を支配者に保証できるかが国家の存立にとって重要な課題になる。輸送手段が限られていた前近代には、国家の中心部に近い地域で臣民と耕作地を集める必要があった。そのため、土地生産性が高く、一定の土地で永続的に耕作が可能な水稻は、国家形成を可能にする農産物として最適であった。事実、東南アジアのほぼすべての前近代国家は灌漑稲作に適した生態環境のなかに見出される。水田耕作を基盤とする伝統的農業国家がその勢力を拡張できる範囲は国家の中核を養うための穀物運搬の困難さを決める地形などによって強く制約されていたとスコットは述べる。本章では、東南アジア大陸部における国家建設に対する地理的制約要因がどのようなもので、国家の立地、維持、そして、権力のダイナミクスにどのような影響を与えたのかが論じられている。

第III章では、東南アジア国家が力づくで進めた人口の集中に焦点が当てられる。近代以前の東南アジアでは、富を安全に保持する

ための唯一の手段だった労働力を集めることが権力の維持に欠かせないものだった。そのため、繁栄した前近代東南アジア国家はみな人口の集積や定住化に熱心であった。土地が豊富な東南アジアに適した移動耕作は人口を分散させる。また、移動耕作が生み出すのは国家が利用できない富でもある。その一方で、土地生産性が高く、収穫が確実な水稻栽培は、穀物と労働力の集中が可能である。したがって、東南アジア大陸部の国家は、灌漑稲作を基本とする均一的な農業生態系を作り出し、人口の凝集化をはかった。その過程では人びとの強制的な移動があった。税や徴兵といった国家空間につきまとう重荷から逃げようとした人びとの流出があったため、国家は常に戦争による捕虜獲得や奴隷狩りなどによって、非国家空間（特に山岳部）から人びとをつれてくる必要があったのである。

第IV章では、国家形成の黎明期に「野蛮」な辺境がどのように作り出されてきたのかが検討される。水稻国家は、その勢力拡大の過程において、周辺の人びとの一部を取り込みつつ、他の人びとを追い出した。追い出された人びとは、さらに高地などの辺境地域へと移動して複合的で小さく分散した生活形態を維持した。水稻国家は、その内にいる人びとを「文明人」としてコード化する一方、自らの勢力圏の外にいる人びとや、そこから逃れる人びと一言い換えれば、国家の中心が容易に搾取できるよう「見えやすい」形で富を生み出しつづけることのできない人びと一に「野蛮人」の烙印を押した。文明人とは、実質的には、国家に完全に統合され、登録され、課税対象になった人びとのことであり、野蛮人はその逆を意味した。つまり、「野蛮人」であるかどうかは国家に向き合ったときの「立ち位置」からのみ浮かび上がってくるものであり、「野蛮」あるいは「非文明」といった概念は国家による産物以外の何ものでもない—このことが、本章ではさまざまな事例を参照しながら述べられている。

第V章では、ゾミアの住民が「いずれかの時期に国家権力が容易には到達し得ない山地部に自発的に移出することを選んだ人びと

の集まり」であることが描かれる。これまで、山地民は「文明的な生活への転換に何らかの理由で失敗してきた先住民」あるいは「文化的・物質的に取り残された私たちの生きた先祖」であるとみられることが多かった。本章では、ゾミア以外のゾミア的な地域の事例も交えつつ、こうした旧来の平地民中心史観とは異なる見方が提示される。スコットによると、彼らを山地部に向かわせた要因には、課税と賦役、戦争と反乱、略奪と奴隷略奪、人と家畜の過密による伝染病、病害虫被害や干ばつによる稲作の凶作と飢饉などがあつた。また、国家空間につきまとうこれらの災厄のほか、山地部で営まれる焼畑農業が病害虫被害にあいにくく、労働生産性が高かつたことも、人びとが平地国家に同化しない道を自発的に選択した背景にあつたという。

ところで、東南アジア大陸部の山地部に関する歴史と民族誌のほとんどは、スコットが指摘するように、明示的であれ暗黙裡であれ、山地民が住む場所、居住形態、農業、社会構造を所与のものとして自明視し、伝統や生態学的な制約に縛られたものとして扱うことが多い。スコットは、こうした制約があることを認めつつも、山地民の営みのなかには、戦略的に選び取られた要素があることを強調する。第VI章では、この点に関連して、国家をかわす、あるいは、国家を拒む戦略を、居住場所、移動性、農業のあり方、社会構造に着目して説明している。

紙幅が限られているので、ここでは、農業についての議論のみを簡単に紹介しておきたい。旧来の文明論では、人類の生業戦略で最も原始的な形態は狩猟採集であり、遊牧、園芸・移動耕作、定住型農業、灌漑農業、産業型農業の順に、より進歩的になると考えられている（これに対応して社会組織の進化の順は小規模集団、集落、村落、町、都市、大都市になる）。これは、より多くの農産物が集積し、より高い凝集性を持って人口が増加していく順序でもある。これまでの文明論では、人口の集中化と穀物の集約的な生産という単線的で不可逆的な発展が想定されてき

た。しかし、ゾミアを含む東南アジアや新大陸の歴史的・考古学的資料によると、多くの社会が複数の生業を同時に行っていたり、長期的にはこれらの生業・社会組織的パターンのあいだを揺れ動いたりしていた。また、「原始的」だと考えられてきた人びとの多くは、定住型農業と政治的服従に見切りをつけ、より自由かつ自律的な移動農耕や狩猟採集を意図的に選択した人びとだったことも最近になってわかってきた。

国家による横奪を妨げるために設計された耕作様式をスコットは「逃避型農業 (escape agriculture)」と呼ぶ。東南アジア大陸部の山地で最も一般的な農業形態である移動耕作は、国家空間の外部に人びとがとどまることを可能にする。また人口が分散するので、逃げる時に有利に働く。また移動耕作は、複数作物を同時に栽培し、収穫期が多様で長く地中に保管できる根菜類の生産に重きを置くことができるので、支配者による収奪被害を最小限に抑える利点を持つ。逃避型農業としての移動耕作の選択は、国家による収奪に対する人びとの戦略的な抵抗とみなすことができるとスコットは主張する。

第VI章と第VII章の間には、第VI+1/2章という短い章が収まっている。山地民が読み書きができないのは、識字以前の段階にあるからではなく、識字以後の段階、すなわち、国家から逃避し、社会構造や生業習慣を変化させるなかで、筆記と文書の世界を主体的・戦略的に捨て去ったからではないか。本章ではそうした大胆な仮説の検討が行われる。なお、本章での議論に対してスコットはその確からしさに自信が持てないことをほめかしているが、ここで展開される、歴史を持つこと/持たないことの意味に関する議論は本書のなかでも最も刺激的な論考の一つである。

第VII章の冒頭で、スコットは「ある特徴に基づいて民族を規定しようとする方法は東南アジアの山地では通用しない」と指摘する。ビルマの英国植民地政府が行った国勢調査は、「人種」の分類に言語を用いたが、山地民は二つ以上の言語を話すことが普通で

あったため、大変な混乱が生じた。また、ある文化的特徴（生業、服装、儀礼など）に基づいて民族の境界を定めても、ある集団からある集団へと切れ目のない連続性があり、仮にある特性に着目して境界線を引いたとしても、着目する特性の数だけ相互に矛盾する境界線ができた。また人びとはあるものから別のものへ容易に民族的アイデンティティを変えた。

ゾミアは国家がもたらすさまざまな苦痛やリスクから逃れてきた人びとが、長期にわたって次々と移り住んできた地域である。ここでは、逃避民と山地民が合流し、方言、慣習、アイデンティティをいっそう複雑にした。生業技術も異なる標高に応じて多様化し、それによって民族も多様化した。また、山地では、奴隷、通婚、養子縁組などを通じた人の移動があり、それが複雑なアイデンティティを構成した。こうした複雑な民族の混合・流動状態では、民族のアイデンティティを外から規定しようとする試みは挫折する。これに代わる唯一の分析方法は、民族的アイデンティティを政治的な事業として読むことだという。このような認識に立脚して本章では、山地民の民族的アイデンティティとは、権力と資源をめぐる競争において、他者（低地国家や他の山地民）に対して優位に立つよう自らを位置づけるために政治的に設計され、作り出されてきたものだという構築主義的な見方が述べられる。

第 VIII 章では、低地国家からの借り物である千年王国的な宗教思想・実践がゾミアの人びとの国家編入を拒む技法の一つであることが論じられる。ゾミアでは適応や同化によって低地国家に溶け込む人びとがいた一方、フモン、カレン、ラフの人びとのあいだで頻繁にみられたように国家の支配に対し反乱を起こしてきた人びともいた。国家への編入を防ぐ山地民の技法には、既述のとおり、僻地への逃避や焼畑農業や社会的分裂・分散などがあるが、反乱もそうした技法の一つである（おそらく最終手段として用いられるリスクの高い技法ではあるが）。反乱を率いたのは、カリスマ的預言者であり、それを支え

たのは救済を求める人びとの意識であった。彼らの反乱は、低地でのそれが国家に包摂される際の条件の是正を求めるものだったのに対し、国家管理そのものの拒否・抵抗の現れだった。ゾミアの山地民社会は民族的に多様である。そうした差異の境界を越えて人びとを広く結合させたのは、聖者に率いられた世俗的な宗教的救済の思想だった。平等主義的で指導者のいない小社会が分散したゾミアの山地では、連帯行動を組織する中枢が存在しなかったため、人びとの動員はカリスマ的な預言者を介してのみ可能だったのである。

最終章（第 IX 章）では、本書全体の総括の後、ゾミアに暮らす山地民は社会進化ピラミッドの底辺に位置づけられる未開人などではなく、「権力に反発して意図的に国家なき状態を作り出し」、「国家の手中に陥らないように注意しながらも諸国家からなる世界にうまく順応してきた」人びとであるという本書の結論が述べられる。

以上、厚さ約 3.5 cm の大著の概要を足早にみてきた。評者の関心にひっかかる部分へと記述が偏ったところもあるし、紙幅の関係で紹介できなかった興味深い論点がいくつもある。

さて、全体を通じて訳は大変わかりやすい。しかし、訳書に対してあえて注文めいたことを述べるとするならば、索引の作られ方である。原著と異なり、訳書の索引は人名や民族名を中心に作られており、「自己野蛮化」、「文明論」、「逃避型農業」、「平等主義」など本書で多用される重要概念は索引に含まれていない。本書の全体を通じてこれらがどのような文脈・意味で用いられているか読者が検討しやすいよう、増刷の際にはこれらを含めた索引を作っていたいただければと思う。

### 3. 本書の意義

本書は多方面から大きな関心を集め、これまでに多くの書評が書かれている。それらのほぼすべてが本書を高く評価しているが、次のような批判も寄せられた。すなわち、(スコットが主張するように) 低地国家のすべてが一様に政治的・経済的・文化的な標準化や

笹岡正俊 2015. 11

人びとの支配を行ってきたわけではない (Boyce et al. 2011)、山地民の集団間の権力闘争にあまり目が向けられていない (MacLean 2012)、よく統治された国家のうちに生きることの利点が軽視されている (Krasner 2011)、(文字を持たないことを含め) あらゆることを (蓄積された) 人間の意志の結果として説明できるとする立場に偏っている (Orrego 2011) などである。

このような批判が (部分的に) 正しいとしても、それによって本書全体の意義が損なわれるわけではない。スコットは、王朝の記録、平定・和平工作に関する報告、山地民に関するヨーロッパ人の記録、口述資料、E. リーチ、E. K. レーマン、R. オーコナーなどによる民族誌、そして、その他関連する多くの資料を吟味し、それらのなかに断片として散らばっているデータや論点を結びつけながら、ゾミアに生きる人びとの農業生態、移動性が高く分散的な居住様式、柔軟で平等主義的な社会構造、そして宗教実践などが「国家支配からの自律性を確保するための戦略」として理解できることを、説得的かつ面白く描いた。また、そのことを通じて、国家の辺境に暮らす「未開人」を何らかの理由で不幸にして文明の階段を上ることができなかった「遅れた」人びとだとみなす、低地国家で生まれ、現在でも広く流布している文明観にインパクトのある異議を呈した。言い換えると、本書を通じてスコットは「文明・近代から無視されてきた人たち」として表象されることの多かった人びとに、主体性 (agency)

と尊厳を与えたともいえる。このことの意義は大きい。

できるだけ多くの人に本書を手にとって読んでほしい。国家という仕組みのなかに組み込まれて生きることの自明性を疑うことがほとんどないわれわれに、本書は「国家」、「文明」、「未開 (性)」、そして「歴史」について根底的に思考するための材料を提供してくれるはずである。

#### 参考文献

- Geoffrey Boyce, Conor J. Cash and Sarah Launius (2011) James C. Scott, *The Art of Not Being Governed : An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. *Antipode*, 43(4) : 1434-1436.
- Ken MacLean (2012) James C. Scott, *The Art of Not Being Governed : An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. *Comparative Studies in Society and History*, 54(1) : 217-223.
- Stephen D. Krasner (2011) *State, Power, Anarchism : A Discussion of The Art of Not Being Governed : An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. *Perspectives on Politics*, 9(1) : 79-83.
- Agustín Goenaga Orrego (2011) *The Art of Not Being Governed : An Anarchist History of Upland Southeast Asia*. *Journal of East Asian Studies*, 11(3) : 509-511.

(みすず書房、2013年10月、464頁、6,912円)